

自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児の方言使用について —青森県津軽地方の保健師への調査から—

Use of a local dialect on infants with ASD and typically developing infants : Public health nurse's report in Aomori.

松 本 敏 治*

Toshiharu MATSUMOTO*

要旨

「自閉症は方言を話さない」という印象が全国的な現象として存在することが特別支援学校の教員への調査から明らかにされている。また、乳幼児健診に関わる医療関係者からは、幼児期においても既に“育った地域のことではなく共通語を話す”などとする報告がある。しかし、幼児については、系統的組織的な調査は行われていなかった。本研究では、青森県津軽地域の保健師に対して、自閉スペクトラム症 (ASD)、知的能力障害 (ID)、注意欠如・多動症 (ADHD) 幼児の方言の使用および乳幼児健診時点での定型発達の子どもや保護者の方言使用について質問紙調査を行った。結果は、幼児においても ASD の方言使用が ID に比べ少ないとする印象が存在することが確かめられた。

序

近年、自閉スペクトラム症 (ASD) 児童生徒が方言をあまり話さないという現象に注目が集まっている¹⁾。きっかけとなったのは、松本・崎原²⁾の青森県および秋田県の特別支援教育関係者を対象におこなった ASD・知的能力障害/知的障害 (ID)・典型発達 (TD) の方言使用に関する調査報告であった。その結果は、特別支援教育関係者が ASD は ID および TD に比べて方言を使用しないとする印象を持っていることを示した。また、青森県弘前市の特別支援学校において児童生徒の方言語彙使用数についての調査も行っており、対応する共通語語彙の使用数には ASD を有する群と有しない群 (non-ASD) で差がないにもかかわらず、ASD 児童生徒の方言語彙使用数は non-ASD の児童生徒のそれに比べ顕著に少ないとする結果を得ている。さらに松本・崎原・菊地・佐藤³⁾は、この調査を、国立特別支援教育総合研究所の研修に全国より参加した教員、および京都・舞鶴・高知・北九州・大分・鹿児島県の特別支援学校教員に対しても実施し、全地域において同じく ASD は ID および TD に比べて方言使用が少ないとする印象が存在することを示した。また、青森県から言語的にも地理的にも離れた高知の

特別支援学校において方言語彙使用の調査を行い、弘前と同様に ASD の児童生徒の方言語彙使用数が non-ASD のそれを顕著に下回ることを報告している。これらの結果は、「自閉症が方言を話さない」という印象が全国的に普遍的な現象であることを示した。

さらに、ASD の方言語彙理解についての研究として、菊地・中石¹⁾の報告がある。彼らは、松本ら^{2) 3)}が報告した ASD の方言不使用が、「方言を理解していない」のか、「方言を理解しているが話さない」のかを明らかにする必要があるとして、方言理解について次のような実験を行った。ASD (小学校4年~6年) 15名と TD (4年生) 25名に、熊本弁の文章を聞かせ、それを標準語 (共通語) に翻訳する課題を課した。その回答を単語ごとに理解出来ているか否かを4件法で採点し、ASD と TD の成績を比較した。結果は、ASD が平均44.5 (SD=20.9) であるのに対し、TD は70.5 (SD=28.2) で有意な差が見られた。ASD では、方言理解も TD に比べ低いことが示された。

自閉症の方言不使用という印象を引き出す原因についての解釈は次のようなものが存在する⁴⁾。1) 方言のもつ音韻やプロソディが ASD にとっては処理または発声・発話しにくいとする説。2) ASD はプロソ

* 弘前大学人文社会・教育学系

ディに含まれる社会的・感情的機能を理解できないため（方言）プロソディを適切に習得使用できないとする説。3）方言の中で特に方言らしさを際立たせており、感情や共感を表す方言終助詞（だべや等）を用いないため、方言を使用している印象が弱いとする説。4）ASDはテレビやビデオから方言を学んでいるとする説。しかし、1）と2）の説では、松本・崎原²⁾・松本ら³⁾が報告している方言語彙の不使用を説明することができない。方言語彙の不使用がすべての品詞に及んでいることから、終助詞のみにその原因をもとめる説では十分な説明とならない。また、メディアから学習しているとする説は、方言語彙の不使用も含めて説明可能ではあるものの、ASDが対人的な関係の中からではなく、メディアから言語を学習する理由と原因を理論的に説明する必要がある。これらのことから、松本ら⁴⁾は、自閉症の方言不使用、特に方言語彙の不使用を説明するには上記の解釈では不十分であると論じている。

それらに替わる解釈として、松本は方言学者である佐藤⁵⁾が提出している「方言の社会的機能説」に着目し、この観点からの検討を行った。佐藤⁵⁾は、現代においては、方言は相手との心理的距離を表現および調整する機能を持っていると見なす。通常、人は会話の中で相手との心理的距離に応じて適した表現様式を用いる。あまり親しくない関係であれば、丁寧なことば遣いをするが、親しきが増すとよりくだけたことば遣いに変わっていく。逆にいえば、ことば遣いが話者の考える相手との心理的距離を表現しているともいえる。方言もこのような意味で、相手との心理的距離を表す表現様式の一つであると考えられる。佐藤⁵⁾によれば、方言には1) 帰属意識の表明機能、2) 連携意識の表明機能、3) 感情の表出機能、4) 他者との差異化機能、5) 緊張の緩和機能などの働きが含まれる。大修館『言語』編集部⁶⁾がおこなった調査によれば、方言と共通語の使い分けは、方言か共通語かというような二項的対立ではなく、相手や状況によってグラデュエーションのように変化していくことが確かめられている。これらのことから、松本ら⁴⁾は、ASDの方言不使用の原因を対人的・社会的障害に求め、ASDは方言の社会的機能を的確に理解できず、その結果として方言の使用に困難を示すとしている。また、方言を使用していたとしても、そこにはこのような社会的機能の理解、あるいは相手との心理的距離の理解に応じた柔軟な使い分けは見られないであろうと予測している。

方言の社会的機能説による解釈は、帰属意識や連携意識が獲得されている青年・成人においては合理的なようにみえる。しかし、ASDの方言不使用については、幼児期においてもみられるとする報告がある。小枝⁷⁾、木村⁸⁾、橋本⁹⁾が、ASDの言語コミュニケーションの特徴としてつぎのように述べている：「会話のずれ、方言を使うことが少なく、丁寧な言葉遣い⁷⁾」、「親の方言などとは関係なく標準語で一本調子にしゃべる⁸⁾」、「育った地方の方言ではなく共通語を話す⁹⁾」。帰属意識や連携意識などが十分に発達していないと思われる幼児期においても見られるこれら方言不使用についての説明にはさらなる検討が必要と考えられた。

そこで松本・崎原・菊地¹⁰⁾は、幼児期に見られる方言の不使用について、意図理解の側面から次のような解釈を提出している。TDは、共同注意や意図読み・意図理解に基づく模倣など社会的認知を通して、家族が使用することば（方言）を習得して行く。一方、ASDは意図理解等に困難を抱える。そのため身近な人の言語を習得することが出来ず、本人にとって興味を引きやすく繰り返し提示されるメディア媒体（ビデオ等）から、意図理解に基づかない模倣などを下に言語習得する可能性を指摘している。

ただ、幼児期のASDの方言不使用については、先に述べたような個別の印象が散見されるのみで、組織的系統的資料は見当たらない。そこで、方言主流社会で障害を持つ乳幼児と対応する機会が多い保健師が、「ASDは方言を話さない」という印象を有するか否かについて調査することとした。地域としては、松本・崎原²⁾が調査を行い地域において方言使用が優位であり児童期以降の子どもにおける方言使用の証拠ならびに児童期・青年期のASDの方言不使用の証拠が得られている青森県津軽地域を対象とした。

幼児の健診に関わる保健師を対象に、乳幼児健診を受診した幼児と保護者の方言使用およびASD・ID・ADHDと診断された（/後に診断された）子どもの3歳6ヶ月での方言使用の印象を質問紙により尋ねた。

今回の調査の主目的は次の2つである。1) ASD幼児における方言不使用という印象を保健師はもっているか、2) 主に3歳6ヶ月児における子どもおよび保護者の方言使用についての資料収集。

方 法

調査対象：方言主流使用社会とみなされる青森県弘前市・藤崎町・板柳町・鶴田町・五所川原・つがる市の

保健師90名。

配布方法：市町役所を訪問し担当窓口にて質問紙を手渡しし、乳幼児健診を担当する保健師を対象としたアンケートであることおよび調査趣旨について説明の上、回答を依頼した。

回収方法：市町村ごとに返信用封筒を手渡し、メール便での返送を依頼した。実施期間：2015年4月。

質問紙：1) 勤務地域・保護者・回答者の方言使用、2) 3歳6ヶ月健診での子どもおよび保護者の方言あるいは共通語の使用、3) 1歳6ヶ月健診での保護者の方言の使用、4) ASD・ID・ADHDの3歳6ヶ月健診時点での方言使用程度について選択肢による回答を求めた。

使用している語彙を質問する際に使われた単語は次のような基準で選ばれた。事前に津軽地域の乳幼児健診に関わる青森県出身の保健師5名および臨床発達心理士1名に聞き取りを行い。健診等で聞いたことがあるとされた次の津軽弁語彙と対応する共通語語彙各10語を選んだ。わ/わたし・僕、まいね/だめ、へば/じゃあ(ね)、だはんだ/だから、だっきゃ/だよね、ける/あげる、なんどな/なんでだよ、～べ/しよう、わいは/えっ、こんき/このくらい。

結果

回収数55(弘前市10、藤崎町7、板柳町5、鶴田町7、五所川原15、つがる市11)、回収率61%。

回答者の出身地は、青森県50名(91%)、県外4名(7%)、無回答1名(2%)であった。保健師としての勤務年数は8割が6年以上であり、7割近くが乳幼児健診担当経験年数6年を超えていた。

1. 地域・保護者・回答者の方言使用

勤務地・保護者・回答者の方言使用については、「1. 使う 2. まあ使う 3. あまり使わない 4. ほとんど使わない」の4件法で尋ねた。また、回答者(保健師)については、相手が保護者である場合と子どもである場合に分けて自身の方言使用について尋ねた。勤務地での方言使用については、80%が「使う」18%が「まあ使う」を選択しており、津軽地域を方言主流社会とする方言学の先行研究と一致する結果を示した(Fig. 1)。保護者の方言使用についての評価は、それに比べるとやや弱くなるものの、「使う」「まあ使う」は84%に達する(Fig. 1)。

また、回答者の90%以上が県内出身者であり、日常生活では多くが方言を使用していた(「使う」56%、「まあ使う」35%)。しかし、健診時においては「使う」29%。「まあ使う」36%と減少、一方「あまり使

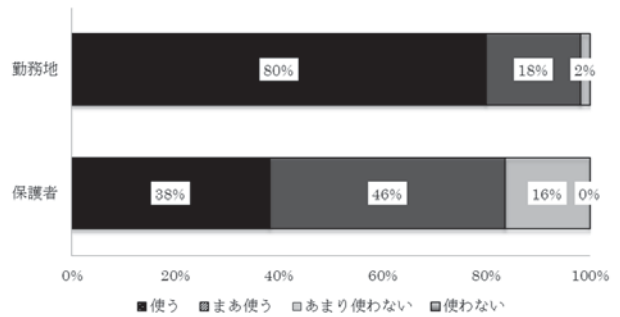


Fig. 1 勤務地および乳幼児健診の保護者の方言使用

わない」33%と増加し、公的場面では方言使用を抑制する態度があることがみられた。子どもへの話し掛けにおいては、方言使用の抑制傾向はさらに強くなるとの回答が得られた(Fig. 2)。

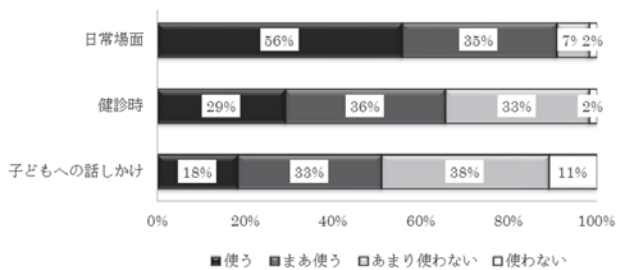


Fig. 2 回答者(保健師)の方言使用

2. 障害による方言使用の差および母親の話し掛け

回答者が対応した子どもにASD、ID、ADHDを有する子どもがいたかどうかを尋ねた。回答者のうち、43名(78%)がASD、43名(78%)がID、そして29名(53%)がADHDに対応したことがあると答えた。対応したことがあるとした障害を持つ子どもの3歳6ヶ月の健診時点でのことばについて「発話なし、方言、共通語、発話やイントネーションは方言だがことばは共通語」の4択で尋ねた。なお、「発話やイントネーションは方言だがことばは共通語」については、方言イントネーションを用いていると考えられるため、図においては、「発話なし、方言、発話やイントネーションは方言だがことばは共通語、共通語」の順に表示している(Fig.3)。ASDでは「方言」「発話やイントネーションは方言だがことばは共通語」「共通語」の順で割合が増加するのに対して、IDではまったく逆の傾向を示す。「方言」とそれ以外に分けて、ASDとIDで「方言」選択比率の差についてMcNemar検定をおこなったところ、5%水準で有意差がみられた。また、「共通語」とそれ以外に分けて、ASDとIDで「共通語」選択比率の差についてMcNemar検定をおこなったところ、1%水準で有

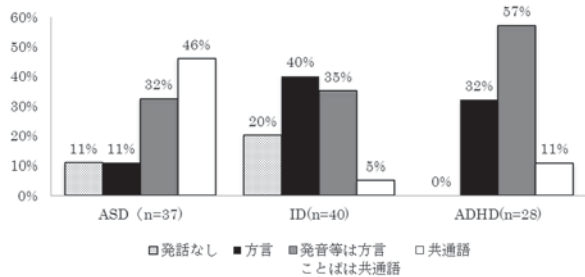


Fig. 3 3歳6ヶ月健診時でのASD・ID・ADHDの方言使用

意差がみられた。ADHDにおいては、「発話やイントネーションは方言だがことばは共通語」がもっとも多く57%であった。

また、子どもが障害をもつことが明らかになった場合、相談機関からの助言などによって子どもへの話しかけ方を変えている可能性が考えられた。そのため、保護者がその子どもに対してだけ話し方を変えているかどうかを尋ねたところ、いずれの障害においても「あまり変えていない」「変えていない」とする回答が8割を上回った。

3. 1歳6ヶ月と3歳6ヶ月健診での保護者の子どもへの話しかけ

回答者に、保護者の子どもへの話しかけに関して次の2つの質問で尋ねた。1) 保護者の子どもへの話しかけは方言ですか？(はい、いいえ)、2) 保護者の子どもへの話しかけにはどのような特徴がありますか？(幼児語で話す、共通語的に話す、方言で話す、その他)。

方言で話しかけているか否かについては、1歳6ヶ月では65%、3歳6ヶ月では67%が保護者は方言で話しかけているとして差が見られなかった (Fig. 4)。一方、話しかけの特徴として尋ねた場合、1歳6ヶ月では「幼児語」が4割弱であるが方言は1割を下回り、3歳6ヶ月では「幼児語」による話しかけはほとんどみられなくなり、「方言」による話しかけが増えている。共通語とする回答は、どちらの時期におい

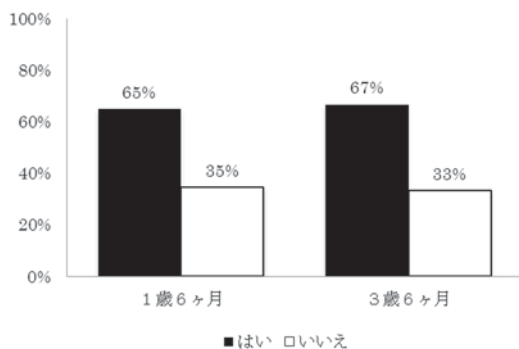


Fig. 4 保護者の子どもへの話しかけは方言か

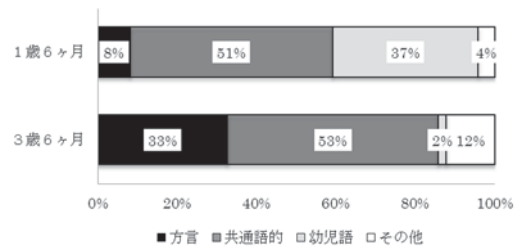


Fig. 5 保護者の子どもへの話しかけの特徴

ても5割を超えていた (Fig. 5)。

これについてクロス集計を行ったところ、1歳6ヶ月では2)の問いに「幼児語」と回答した17名中10名が、1)の問いに「はい」、つまり保護者は方言で話しかけていると回答している。同様に、「共通語的」とした回答者24名中15名は1)の問いに保護者は方言で話しかけていると回答した。3歳6ヶ月では、2)の問いに「共通語的」とした回答者26名のうち12名が1)の問いに保護者は方言で話しかけているとする。2)の問いに「方言」を選んだ16名中15名が、1)の問いでは「はい」と回答した。(Table 1)。

Table 1 保護者の子どもへの話しかけは方言か？特徴は？
1歳6ヶ月

		保護者から子どもへの話しかけの特徴				合計
		幼児語	共通語的	方言	その他	
保護者の子どもへの話しかけは方言ですか？	はい	10	15	4	1	30
	いいえ	7	9	0	1	17
合計		17	24	4	2	47

3歳6ヶ月

		保護者から子どもへの話しかけの特徴				合計
		幼児語	共通語的	方言	その他	
保護者の子どもへの話しかけは方言ですか？	はい	1	12	15	3	31
	いいえ	0	14	1	2	17
合計		1	26	16	5	48

4. 3歳6ヶ月健診での子どもの話し方

子どもの方言語彙および対応する共通語語彙の使用について尋ねた。方言語彙においては、使用するとする回答が20%を超えたものは「こんき」のみであった。一方、共通語語彙では、「僕・わたし」「だめ」「あげる」「しよう」などは5割以上の回答者が使用すると判断した (Fig. 6)。

方言らしい発音やアクセントで話しているかどうか尋ねたところ、46%が「当てはまる」「まあ当てはまる」、56%が「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と回答した。

さらに、子どもの話し方について「方言、方言に近い、共通語に近い、共通語、幼児語」の5択で尋ねた

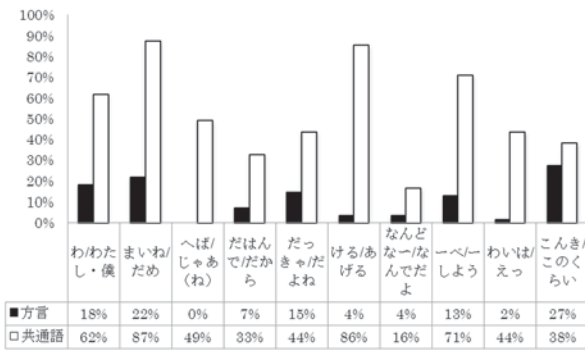


Fig. 6 子どもが使用する方言語彙と対応する共通語語彙（3歳6ヶ月）

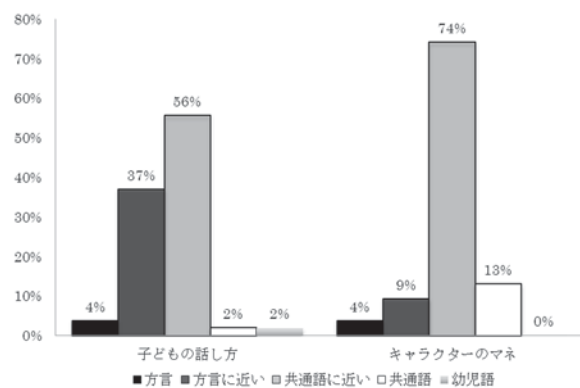


Fig. 7 子どもの話し方とキャラクター模倣時の話し方（3歳6ヶ月）

ところ、41%が「方言」「方言に近い」、58%が「共通語に近い」「共通語」となり、上述の発音およびアクセントの数値とかなり近似している。一方、テレビのキャラクターの模倣の際の話し方について尋ねたところ、「共通語に近い」「共通語」とする判断が顕著に増加した（Fig. 7）。「方言・方言に近い」と「共通語・共通語に近い・その他」に分けて、McNemar検定をおこなったところ、1%水準で有意差がみられた。

子どもの話し方と家族の話し方の類似性について判断をもとめたところ、6割が似ているとの判断を示した。

相手によることばの使い分けに関する質問では、「相手による丁寧語の使用」について73%、相手による“共通語と方言”の使い分けは87%が「いいえ」と回答しており、3歳においては相手による言語様式の使い分けの印象は認められない。

考察

本研究は、ASD幼児が方言を使用しないとする小林⁷⁾・木村⁸⁾・橋本⁹⁾らの記載について、障害をもつ幼児に接する機会を多く有する保健師を対象に、上記の報告を確認することを第一の目的とした。乳幼児健診を担当する保健師は、長期にわたって子どもの生育

状況について情報を有しており、特に発達において障害あるいは疑いがある事例については詳細なフォローアップを行っている。このことから、保健師がASDを含む障害をもつ子どもの発達の経緯について十分に把握していると考えられた。

回答者の8割が勤務経験6年以上、7割が乳幼児健診担当6年以上であり、乳幼児の観察および対応経験は十分であると見なされる。また、回答者のほとんどが青森県内出身者であり、回答からは津軽方言を理解することおよび地元の方言を使用する人々と方言による会話が可能であることが確かめられた。

回答者は、公的場面である健診においては、方言使用を抑制する様子が見て取れた。また、子どもに対する話しかけにおいても方言が抑制されている。これが健診という場面によるものか、対象が幼児であることによるのかは今回の設問では明白に区別出来ないものの、方言が相手や場面によって使い分けされる様子が確認された。

勤務地域での方言の使用については、98%が方言を「使う」「まあ使う」を選択し、84%が保護者も方言を使っている（「使う」「まあ使う」）を選択しており、津軽地域の乳幼児の保護者世代も方言を使用していることが確かめられた。

回答者のうち8割が、ASDおよびIDと対応したことがあると答えた。3歳6ヵ月時点での方言使用についての評定は、両者でまったく異なるものになった。両者とも、「発音やイントネーションは方言だがことばは共通語」とする回答が3割を超えているが、「共通語」と「方言」を選択したものの割合には顕著な差がみられた。ASDについては回答者の4割が共通語を選んでおり、方言を選んだものは1割程度である。逆に、IDでは方言を選択したものが4割、共通語を選択したものは1割にも満たなかった。このことは、幼児においてもASDが方言を使用していないとする小林⁷⁾・木村⁸⁾・橋本⁹⁾らの報告と一致している。ただし、これらの障害の確定診断は、3歳6ヶ月健診以後においてなされている可能性もある。そのため、質問としては「3歳6ヶ月時点」での方言使用を尋ねているものの、確定診断後の印象が影響を及ぼしている可能性は否定出来ない。ただし、保健師によるこれら障害をもつ子どもへの関わりは、学齢期前が主となっている現状を考えると、印象が学齢期前の状態にもとづくものであると考えられる。医療関係者から指摘のあったASD幼児の方言不使用という印象が方言主流地域である青森県津軽地域の保健師においても認めら

れることが確認された。

保護者の TD の子どもへの話しかけにおける方言の使用について2つの質問で尋ねた。幼児の年齢にかかわらず、回答者の7割弱が、保護者の子どもへの話しかけは、「方言」であると評定している。ただし、話しかけ方を「はい（方言）」と回答しながら、第二の質問で「共通語的」と回答したものが半数近く見られた。このことは、方言使用についての印象が、単に共通語か方言という二分法ではなく、少なくとも方言、共通語的方言、共通語という3つに別れることを示していると考えられる。さらに、1歳6ヶ月の第二の質問において「幼児語」を選んだ回答者の半数以上が第一の質問で「はい（方言）」を選んでいることは、方言幼児語という印象が存在する可能性も考えられる。

また、幼児の方言使用についての結果を見てみると、話し方については4割弱が方言に近いという印象をもっており、方言発音やアクセントが当てはまるとする回答も4割強であった。幼児でも方言あるいは方言的発音あるいはアクセントを使用するという印象を半数の保健師は持っている。

ところが、ごっこあそびやテレビのキャラクターを真似する際の話し方についての印象は大きく異なっている。共通語あるいは共通語に近いが8割を超える。これは、幼児がキャラクターを演じる際に、日常生活での話し方とは異なる発音やイントネーションを表出している可能性がある。普段、日常生活では使うことがないアニメや特撮戦隊もののセリフなどもおそらくは共通語あるいは共通語的発音やイントネーションを用いているであろう。日常生活の話し方と、ふり遊びにおいてみられる言語様式の切り替えが3歳時点で見られることを示す資料と考えられる。

しかし、場面による丁寧語の使用や、方言と共通語の使い分けは出来ていないと見なされている。つまり相手との関係性の理解にもとづく使い分けは出来ていなくとも同一視にもとづく表現様式の使い分けは可能と思われた。

3歳6ヶ月での方言語彙使用については、対応する共通語語彙に匹敵するほど使用されているとする印象がある語彙は存在しない。「わ」「まいね」「こんき」

などについては、2割程度の回答者ではあるものの幼児が使用する語として挙げている。ただし、方言語彙の使用は、家族の影響だけでなく集団参加（幼稚園・小学校）により増加する可能性も考えられる。方言語彙の習得過程の発達的变化についても検討する必要がある。

保健師を対象とした今回の調査からは、ASD 幼児の方言使用が ID および ADHD 幼児に比べて少ないとする印象が存在することが確認された。

引用文献

- 1) 菊地哲平・中石ひさ子 2014 自閉症スペクトラム障害児における方言理解の特徴、日本特殊教育学会第51回大会発表論文集、P1-G-8.
- 2) 松本敏治・崎原秀樹 2011 自閉症・アスペルガー症候群の方言使用についての特別支援学校教員による評定 - 「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂との関連で - 特殊教育学研究, 49 (3), 237-246.
- 3) 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文・佐藤和之 2014 「自閉症は方言を話さない」との印象は普遍的現象か - 教員による自閉症スペクトラム障害児・者の方言使用評定から - 特殊教育学研究, 52 (4), 263-274.
- 4) 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 2013 自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討 . 弘前大学教育学部紀要, 109, 49-55.
- 5) 佐藤和之 2002 人はなぜ方言を使うのか . 国文学, 47 (11), 88-95.
- 6) 『言語』編集部 1995 変容する日本の方言 - 全国14地点、2800名に言語意識調査 - 月間言語, 95 (11), 大修館書店.
- 7) 小枝達也 2007 I よくみる子どもの心の問題 発達障害、広汎性発達障害・アスペルガー障害 . 母子保健情報, 55, 28-32.
- 8) 木村直子 2009 幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法 . 鳴門教育大学研究紀要, 24, 13-19.
- 9) 橋本俊顕 2011 I. 母子保健から見た発達障害, 広汎性発達障害 (自閉症スペクトラム) . 母子保健情報, 63, 1-5.
- 10) 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 2015 自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈 - 言語習得から方言と共通語の使い分けまで - 弘前大学教育学部紀要, 113, 93-103.

(2016. 1.18 受理)